

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

平宗盛抄

著者	石塚 栄
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	25
ページ	66-78
発行年	1973-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/10211

平 宗 盛 抄

石 塚 栄

序

まず、平氏政権を想起するとき、当然のことながら、清盛の存在がクローズ・アップされるが、小稿では、その後継者として、治承・寿永の内乱期に平氏一門の中で棟梁の地位を占めた宗盛について記述する。

一

宗盛は、鳥羽院政¹近衛天皇在位の久安三年（一一四七年）、正四位下・安芸守、兼中務大輔の地位にあった平清盛（三〇才）を父として出生した。すなわち、清盛が、「天台大衆。日吉祇園神人等。早^ニ神興^ニ下洛。訴^ニ申中務大輔清盛朝臣於^ニ祇園社闘乱事^一。法皇遣^ニ廷尉^一禦^レ之。但蒙^ニ裁許^一飯^レ山。」²によって、「於^レ院諸卿議^ニ法家勘申清盛朝臣罪名。罪当^ニ贖銅^一。」の処分をうけた年である。³ときに平氏一門は、父清盛のほか、祖父忠盛五二才（正四位上）、母時子二三才（正五位下・兵部権大輔藤原時信の女）、長兄重盛一〇才、次兄基盛九才、叔父では経盛二四才、教盛二〇

才、頼盛一六才（従五位下・藏人）、忠度四才、母方では、叔父時忠一八才（左衛門尉）、叔母滋子六才（後ちの建春門院）、叔父親宗四才、叔母に当る女子二才（後ちに宗盛の室）などで、重盛・基盛の生母は右近衛将監高階基章の女であり、宗盛は時子の第一子であつた。⁴

公卿補任によれば、宗盛は、保元二年十月に一一才で叙爵し、

平治元年十二月（二三才）平治の乱の勲功によって遠江守に任じ、永暦元年正月（二四才）には淡路守となり、同年四月右兵衛佐を兼任した。また、愚管抄には、「平治の乱」熊野詣ヲシタリケルニ。清盛ハイマダ参リツカデ。フタガハノ宿ト云ハタノベノ宿ナリ。ソレニツキタリケルニカクリキハシリテ。カカル事京ニ出キタリト告ケレバ。コハイカガセンズルト思ヒ煩ヒテアリケリ。子ドモニハ越前守基盛ト。十三ニナル淡路守宗盛ト。侍十五人トヲゾ具シタリケル」の記述。それに、山槐記では永暦元年十二月八十島使典侍（清盛の女）が敵島に下向するに際し、六波羅邸に参集した平氏一門（頼盛、重盛等）の中に淡路守・兼右兵衛佐宗盛の名がみえている。そして宗盛は、永暦二年正月従五位上に叙

し、応保二年正月（一六才）淡路守で左兵衛佐を兼任、同年十月淡路守で左馬頭を兼任、長寛元年十二月（一七才）左馬頭を兼任のままで美作守に任じ、長寛二年十一月正五位下に叙し、永萬元年七月（一九才）従四位下に叙し、仁安元年八月（二〇才）従四位上に叙し、同年十月従弟の憲仁親王（六才）父は後白河上皇、母は建春門院の立太子の儀には時忠とともに昇殿しており、同年十一月正四位下に叙し、仁安二年正月美作守のままで右近衛中将に任じた。

かくて、青年期に入った宗盛が直面したのは、同年二月における清盛の従一位・太政大臣への到達（後白河院政Ⅱ六条天皇在位）である。これによって、平氏一門の貴族化コースは完全に確立され、この環境の中で宗盛は成長してゆくこととなった。清盛の太政大臣拜任の当日には、宗盛も見任公卿としてその姿をみせている。さらに、宗盛は、仁安三年正月越前権守を兼任、同年三月皇太后宮権大夫を兼任し、参議となり、従三位を経て正三位に叙した。⁽⁴⁾ところで、嘉応元年十二月、藤原成親知行の尾張国目代藤原政友との闘乱を発端とする延暦寺衆徒の訴入洛に対処するため、後白河法皇（同年上皇は落飾された）の要請で、やむなく、清盛は平氏の軍兵五百騎を防戦に充てたが、これには宗盛が率いる百三十騎が含まれていた。⁽⁵⁾ついで、嘉応二年十二月、宗盛二四才は権中納言に任じ、右衛門督を兼任した。同年には長子清宗が生まれている。

そして、承安元年十月法皇と建春門院の福原御幸には、宗盛（二五才）は重盛等と一緒に供奉し、同年十二月院殿上で妹徳子

の入内が決定されたが、その当日には宗盛も参内している。さらに、承安三年十一月宗盛は従二位に叙し、承安四年三月法皇と建春門院の安芸嚴島への参詣にも、弟の知盛（二三才）、重衡（一八才）とともに宗盛は供奉した。⁽⁶⁾なお、当時、長子清宗については、「宗盛卿少童⁽⁴⁾叙⁽⁵⁾従上童加階不聞事也、」（すなわち、清宗は、承安二年正月従五位下に、承安三年正月従五位上に叙し、承安四年正月には侍従に任じた。）といわれた。⁽⁷⁾また、承安五年七月には、「今日、右衛門（門）督宗盛、以信基朝臣、示送頼輔朝臣云、伊津岐島額可⁽³⁾申請、雖有恐、本額前大僧正被⁽⁸⁾書之、今又立⁽⁹⁾島居、仍可⁽³⁾打額、申他人有憚、所⁽⁹⁾申也、可⁽³⁾然之様、相計可⁽⁹⁾令⁽⁹⁾申云々、」のことがあり、安元二年正月清宗（七才）は正五位下に叙し、同年三月に行なわれた法皇の五十宝算の賀宴では、甥の維盛（二七才）が青海波を舞い、前年に左衛門督となった宗盛（三〇才）も陪膳した。この後、同年十二月宗盛は、権中納言を辞して散位となったが、ただちに、安元三年正月還任して、権中納言に復し、右近衛大将を兼任した。ついで、治承元年十月の高倉天皇（憲仁親王即位）の石清水行幸には宗盛も供奉している。⁽⁹⁾

ところで、治承二年正月、法皇の園城寺秘密灌頂伝受が原因で延暦寺僧徒の三井寺焼打が伝わり、その鎮圧のため、法皇から平氏出動の要請が清盛にもたらされた。このとき、法皇の御使は院司の宗盛である。⁽¹⁰⁾しかし、この要請を清盛が拒否したことで、法皇と平氏の対立は、前年の鹿が谷事件―院近臣による平氏打倒の謀議露見―以来の進展をみせた。この情勢の中で、宗盛は正二位に

叙し、清宗も備前介を兼任する。さらに、右近衛大将を兼任のま
ま、同年四月宗盛は権大納言に任じた。⁽¹⁾（この右近衛大将は同年
七月に辞し、同年十二月に復す。）また、同年七月には、中納言
三位と呼ばれた宗盛の室（三三才、清宗の生母）が腫物の病で夭
亡した。⁽²⁾続いて、同年十二月、甥の言仁親王（一才父は高倉天
皇、母は中宮徳子）の立太子の儀があり、その除目では、春宮大
夫に宗盛、亮に重衡、権亮に維盛がそれぞれ任じたが、まもなく、
宗盛は治承三年正月春宮大夫を辞し、同年二月には権大納言と右
近衛大将も辞めて散位となる。この頃、清宗は従四位下に叙した
が、同年三月、病氣の重盛は内大臣を辞した。そして、同年六月
宗盛は、妻の一周忌供養のため、法性寺一橋西ノ辺に一堂を建立
し、一丈六尺の阿弥陀像を造らせている。⁽³⁾かくして、同年七月に
なると、長兄の前内大臣重盛（四二才）が薨じた。よって、三三
才の宗盛は平氏一門の中で清盛の後継者としての地位を強力に推
進することとなった。⁽⁴⁾

註

- (1) 百鍊抄 久安三年六月廿八日、七月廿四日条。
(2) 尊卑分脉第四篇（新訂増補国史大系）七—八頁、三四—
三八頁。
公卿補任第一篇（新訂増補国史大系）四二—五一頁。
↓以下、各註共通。

- (3) 愚管抄（岩波文庫本）一九四頁。

山槐記 永暦元年十二月十五日条。

兵範記 仁安元年十月十日条。

- (4) 山槐記 仁安二年二月十一日条。

- (5) 兵範記 嘉応元年十二月廿三日条。
(6) 玉葉 承安元年正月三日、十月廿三日、承安二年四月廿
七日条。愚管抄 二〇七頁。
兵範記 承安元年十二月二日条。
吉記 承安四年三月十六日条。
(7) 玉葉 承安三年正月六日条。
(8) 玉葉 承安五年七月十三日条。
(9) 玉葉 安元二年三月四日、六日、治承元年十月五日条。
(10) 山槐記 治承二年正月廿日条。
玉葉 治承二年正月廿二日条。
(11) 玉葉 治承二年正月四日、十七日、四月六日条。
山槐記 治承二年六月廿九日条。
(12) 玉葉 治承二年閏六月十一日、十三日、七月十六日条。
山槐記 治承二年閏六月十五日条。
(13) 玉葉 治承二年十二月十五日、治承三年二月廿六日条。
山槐記 治承三年六月三日条。
(14) 山槐記 治承三年六月廿日、廿一日条。
玉葉 治承三年七月廿九日条。
百鍊抄 治承三年八月一日条。
なお、宗盛の次兄基盛は応保二年に二四才で死去してい
る。

二

治承三年十一月、畝島参詣のため、すでに京都を出発していた
宗盛は、その途中で、清盛からの命令をうけて、急ぎ帰洛し、さ
きに福原から上洛の清盛と合流し、集結させた武士数千騎を背景

として、いわゆる治承三年の政変を断行した。その内容は、(A)「上皇(Ⅱ後白河法皇)以法印静賢^レ。自今以後。万機不可有^レ御口入^レ之由。被^レ仰^レ遣之^二」(法皇を鳥羽殿に幽閉した。)、(B)「関白前太政大臣(基房)并権中納言師家解官。以三位中将基通卿可^レ為^レ関白内大臣氏長者之由宣下^レ」。(これに伴い太政大臣藤原師長以下検非違使に至るまで三十九人を解官させた。)、(C)この処分後、平氏一門の人々を含めての除目を行なった。(これによって平氏の知行国独占がなされたという)——などである。そして、この政変断行の理由については、(1)「此事由来者、法皇取^二公越前国^一、故入道内大臣知行^二并被^レ補白川殿倉預^一」。前大舍人、国、維盛朝臣之、已上兩事、法皇過忌云々、三位中将師家、超^二二位中将基通^一任^二中納言^一、師家年僅八歳、古今無例、是博陸(基房)之罪科也、凡此外法皇与^二博陸同意、被^レ乱国政之由、入道相国(清盛)攀縁于々、^三、(Ⅱ)「上皇(Ⅱ後白河法皇)与^二関白^一。可^レ令^レ滅平家党類之由。有^二密謀之由有^二其聞^一」¹⁵⁾。といわれる。(なお、石母田見解によれば、この政変によって平氏政権が成立したとする)。この直後、清盛は福原に下向したが、宗盛はそのまま京都に滞在した模様である。ついで、同年十二月清宗は從四位上に叙し、治承四年二月天皇から春宮への讓位があり、同年三月には、新院(高倉上皇)の安芸嚴島への参詣に供奉するため、京都を進発した宗盛は、途中の福原で、留守にした京都からの風聞として、延暦寺僧徒の蜂起および幽閉中の法皇奪取が伝えられたので、ただちに帰洛した。当時、院との折衝など重要な問題は福原に在住した清盛からの指示によったであろうが、京都の六波羅邸における平氏一門の中心

は宗盛であつた。¹⁶⁾

しかして、安德天皇(Ⅱ言仁親王)が即位された同年四月、法皇の第二皇子の以仁王によって平氏追討の令旨が発せられた。このため、土佐国配流に決定した以仁王を保護する園城寺攻撃が急務となった。同年五月、宗盛以下の平氏一門(頼盛、教盛、経盛、知盛、維盛等)が総動員され、以仁王に与力の源頼政父子を討伐する平氏の本陣が宗盛亭(八条北、高倉東の地)に置かれた。この合戦の起因は令旨にあり、戦場も京都周辺地域であつたがため、事態を重視した清盛は急ぎ福原から上洛してきた。しかし、清盛が上洛したときは、すでに以仁王は南都に敗走(途中討死)していた。よつて、この合戦後、院殿上における凶徒罪科の議定には宗盛が参加し、侍從清宗は追捕賞として從三位に叙した。¹⁷⁾

やがて、同年六月、内乱の兆候を憂慮した平氏は、法皇以下の院政勢力を完全に掌握し、寺院勢力の攻撃を回避する手段として福原遷都を実現した。その模様をみるに、「遷幸儀、以^二見物之^一。自^二八条連^一至^二草津^一、武士数千騎、二行並^二豐夾^一幸路^二先入道相国、惣^二屋形與^一、(中略)次女房與^二二品、及^二撰政^一、次行幸、^三、^四、^五、^六、^七、^八、^九、^十、^{十一}、^{十二}、^{十三}、^{十四}、^{十五}、^{十六}、^{十七}、^{十八}、^{十九}、^{二十}、^{二十一}、^{二十二}、^{二十三}、^{二十四}、^{二十五}、^{二十六}、^{二十七}、^{二十八}、^{二十九}、^{三十}、^{三十一}、^{三十二}、^{三十三}、^{三十四}、^{三十五}、^{三十六}、^{三十七}、^{三十八}、^{三十九}、^{四十}、^{四十一}、^{四十二}、^{四十三}、^{四十四}、^{四十五}、^{四十六}、^{四十七}、^{四十八}、^{四十九}、^{五十}、^{五十一}、^{五十二}、^{五十三}、^{五十四}、^{五十五}、^{五十六}、^{五十七}、^{五十八}、^{五十九}、^{六十}、^{六十一}、^{六十二}、^{六十三}、^{六十四}、^{六十五}、^{六十六}、^{六十七}、^{六十八}、^{六十九}、^{七十}、^{七十一}、^{七十二}、^{七十三}、^{七十四}、^{七十五}、^{七十六}、^{七十七}、^{七十八}、^{七十九}、^{八十}、^{八十一}、^{八十二}、^{八十三}、^{八十四}、^{八十五}、^{八十六}、^{八十七}、^{八十八}、^{八十九}、^{九十}、^{九十一}、^{九十二}、^{九十三}、^{九十四}、^{九十五}、^{九十六}、^{九十七}、^{九十八}、^{九十九}、^{一百}、^{一百一十}、^{一百一十一}、^{一百一十二}、^{一百一十三}、^{一百一十四}、^{一百一十五}、^{一百一十六}、^{一百一十七}、^{一百一十八}、^{一百一十九}、^{一百二十}、^{一百二十一}、^{一百二十二}、^{一百二十三}、^{一百二十四}、^{一百二十五}、^{一百二十六}、^{一百二十七}、^{一百二十八}、^{一百二十九}、^{一百三十}、^{一百三十一}、^{一百三十二}、^{一百三十三}、^{一百三十四}、^{一百三十五}、^{一百三十六}、^{一百三十七}、^{一百三十八}、^{一百三十九}、^{一百四十}、^{一百四十一}、^{一百四十二}、^{一百四十三}、^{一百四十四}、^{一百四十五}、^{一百四十六}、^{一百四十七}、^{一百四十八}、^{一百四十九}、^{一百五十}、^{一百五十一}、^{一百五十二}、^{一百五十三}、^{一百五十四}、^{一百五十五}、^{一百五十六}、^{一百五十七}、^{一百五十八}、^{一百五十九}、^{一百六十}、^{一百六十一}、^{一百六十二}、^{一百六十三}、^{一百六十四}、^{一百六十五}、^{一百六十六}、^{一百六十七}、^{一百六十八}、^{一百六十九}、^{一百七十}、^{一百七十一}、^{一百七十二}、^{一百七十三}、^{一百七十四}、^{一百七十五}、^{一百七十六}、^{一百七十七}、^{一百七十八}、^{一百七十九}、^{一百八十}、^{一百八十一}、^{一百八十二}、^{一百八十三}、^{一百八十四}、^{一百八十五}、^{一百八十六}、^{一百八十七}、^{一百八十八}、^{一百八十九}、^{一百九十}、^{一百九十一}、^{一百九十二}、^{一百九十三}、^{一百九十四}、^{一百九十五}、^{一百九十六}、^{一百九十七}、^{一百九十八}、^{一百九十九}、^{二百}、^{二百一十}、^{二百一十一}、^{二百一十二}、^{二百一十三}、^{二百一十四}、^{二百一十五}、^{二百一十六}、^{二百一十七}、^{二百一十八}、^{二百一十九}、^{二百二十}、^{二百二十一}、^{二百二十二}、^{二百二十三}、^{二百二十四}、^{二百二十五}、^{二百二十六}、^{二百二十七}、^{二百二十八}、^{二百二十九}、^{二百三十}、^{二百三十一}、^{二百三十二}、^{二百三十三}、^{二百三十四}、^{二百三十五}、^{二百三十六}、^{二百三十七}、^{二百三十八}、^{二百三十九}、^{二百四十}、^{二百四十一}、^{二百四十二}、^{二百四十三}、^{二百四十四}、^{二百四十五}、^{二百四十六}、^{二百四十七}、^{二百四十八}、^{二百四十九}、^{二百五十}、^{二百五十一}、^{二百五十二}、^{二百五十三}、^{二百五十四}、^{二百五十五}、^{二百五十六}、^{二百五十七}、^{二百五十八}、^{二百五十九}、^{二百六十}、^{二百六十一}、^{二百六十二}、^{二百六十三}、^{二百六十四}、^{二百六十五}、^{二百六十六}、^{二百六十七}、^{二百六十八}、^{二百六十九}、^{二百七十}、^{二百七十一}、^{二百七十二}、^{二百七十三}、^{二百七十四}、^{二百七十五}、^{二百七十六}、^{二百七十七}、^{二百七十八}、^{二百七十九}、^{二百八十}、^{二百八十一}、^{二百八十二}、^{二百八十三}、^{二百八十四}、^{二百八十五}、^{二百八十六}、^{二百八十七}、^{二百八十八}、^{二百八十九}、^{二百九十}、^{二百九十一}、^{二百九十二}、^{二百九十三}、^{二百九十四}、^{二百九十五}、^{二百九十六}、^{二百九十七}、^{二百九十八}、^{二百九十九}、^{三百}、^{三百一十}、^{三百一十一}、^{三百一十二}、^{三百一十三}、^{三百一十四}、^{三百一十五}、^{三百一十六}、^{三百一十七}、^{三百一十八}、^{三百一十九}、^{三百二十}、^{三百二十一}、^{三百二十二}、^{三百二十三}、^{三百二十四}、^{三百二十五}、^{三百二十六}、^{三百二十七}、^{三百二十八}、^{三百二十九}、^{三百三十}、^{三百三十一}、^{三百三十二}、^{三百三十三}、^{三百三十四}、^{三百三十五}、^{三百三十六}、^{三百三十七}、^{三百三十八}、^{三百三十九}、^{三百四十}、^{三百四十一}、^{三百四十二}、^{三百四十三}、^{三百四十四}、^{三百四十五}、^{三百四十六}、^{三百四十七}、^{三百四十八}、^{三百四十九}、^{三百五十}、^{三百五十一}、^{三百五十二}、^{三百五十三}、^{三百五十四}、^{三百五十五}、^{三百五十六}、^{三百五十七}、^{三百五十八}、^{三百五十九}、^{三百六十}、^{三百六十一}、^{三百六十二}、^{三百六十三}、^{三百六十四}、^{三百六十五}、^{三百六十六}、^{三百六十七}、^{三百六十八}、^{三百六十九}、^{三百七十}、^{三百七十一}、^{三百七十二}、^{三百七十三}、^{三百七十四}、^{三百七十五}、^{三百七十六}、^{三百七十七}、^{三百七十八}、^{三百七十九}、^{三百八十}、^{三百八十一}、^{三百八十二}、^{三百八十三}、^{三百八十四}、^{三百八十五}、^{三百八十六}、^{三百八十七}、^{三百八十八}、^{三百八十九}、^{三百九十}、^{三百九十一}、^{三百九十二}、^{三百九十三}、^{三百九十四}、^{三百九十五}、^{三百九十六}、^{三百九十七}、^{三百九十八}、^{三百九十九}、^{四百}、^{四百一十}、^{四百一十一}、^{四百一十二}、^{四百一十三}、^{四百一十四}、^{四百一十五}、^{四百一十六}、^{四百一十七}、^{四百一十八}、^{四百一十九}、^{四百二十}、^{四百二十一}、^{四百二十二}、^{四百二十三}、^{四百二十四}、^{四百二十五}、^{四百二十六}、^{四百二十七}、^{四百二十八}、^{四百二十九}、^{四百三十}、^{四百三十一}、^{四百三十二}、^{四百三十三}、^{四百三十四}、^{四百三十五}、^{四百三十六}、^{四百三十七}、^{四百三十八}、^{四百三十九}、^{四百四十}、^{四百四十一}、^{四百四十二}、^{四百四十三}、^{四百四十四}、^{四百四十五}、^{四百四十六}、^{四百四十七}、^{四百四十八}、^{四百四十九}、^{四百五十}、^{四百五十一}、^{四百五十二}、^{四百五十三}、^{四百五十四}、^{四百五十五}、^{四百五十六}、^{四百五十七}、^{四百五十八}、^{四百五十九}、^{四百六十}、^{四百六十一}、^{四百六十二}、^{四百六十三}、^{四百六十四}、^{四百六十五}、^{四百六十六}、^{四百六十七}、^{四百六十八}、^{四百六十九}、^{四百七十}、^{四百七十一}、^{四百七十二}、^{四百七十三}、^{四百七十四}、^{四百七十五}、^{四百七十六}、^{四百七十七}、^{四百七十八}、^{四百七十九}、^{四百八十}、^{四百八十一}、^{四百八十二}、^{四百八十三}、^{四百八十四}、^{四百八十五}、^{四百八十六}、^{四百八十七}、^{四百八十八}、^{四百八十九}、^{四百九十}、^{四百九十一}、^{四百九十二}、^{四百九十三}、^{四百九十四}、^{四百九十五}、^{四百九十六}、^{四百九十七}、^{四百九十八}、^{四百九十九}、^{五百}、^{五百一十}、^{五百一十一}、^{五百一十二}、^{五百一十三}、^{五百一十四}、^{五百一十五}、^{五百一十六}、^{五百一十七}、^{五百一十八}、^{五百一十九}、^{五百二十}、^{五百二十一}、^{五百二十二}、^{五百二十三}、^{五百二十四}、^{五百二十五}、^{五百二十六}、^{五百二十七}、^{五百二十八}、^{五百二十九}、^{五百三十}、^{五百三十一}、^{五百三十二}、^{五百三十三}、^{五百三十四}、^{五百三十五}、^{五百三十六}、^{五百三十七}、^{五百三十八}、^{五百三十九}、^{五百四十}、^{五百四十一}、^{五百四十二}、^{五百四十三}、^{五百四十四}、^{五百四十五}、^{五百四十六}、^{五百四十七}、^{五百四十八}、^{五百四十九}、^{五百五十}、^{五百五十一}、^{五百五十二}、^{五百五十三}、^{五百五十四}、^{五百五十五}、^{五百五十六}、^{五百五十七}、^{五百五十八}、^{五百五十九}、^{五百六十}、^{五百六十一}、^{五百六十二}、^{五百六十三}、^{五百六十四}、^{五百六十五}、^{五百六十六}、^{五百六十七}、^{五百六十八}、^{五百六十九}、^{五百七十}、^{五百七十一}、^{五百七十二}、^{五百七十三}、^{五百七十四}、^{五百七十五}、^{五百七十六}、^{五百七十七}、^{五百七十八}、^{五百七十九}、^{五百八十}、^{五百八十一}、^{五百八十二}、^{五百八十三}、^{五百八十四}、^{五百八十五}、^{五百八十六}、^{五百八十七}、^{五百八十八}、^{五百八十九}、^{五百九十}、^{五百九十一}、^{五百九十二}、^{五百九十三}、^{五百九十四}、^{五百九十五}、^{五百九十六}、^{五百九十七}、^{五百九十八}、^{五百九十九}、^{六百}、^{六百一十}、^{六百一十一}、^{六百一十二}、^{六百一十三}、^{六百一十四}、^{六百一十五}、^{六百一十六}、^{六百一十七}、^{六百一十八}、^{六百一十九}、^{六百二十}、^{六百二十一}、^{六百二十二}、^{六百二十三}、^{六百二十四}、^{六百二十五}、^{六百二十六}、^{六百二十七}、^{六百二十八}、^{六百二十九}、^{六百三十}、^{六百三十一}、^{六百三十二}、^{六百三十三}、^{六百三十四}、^{六百三十五}、^{六百三十六}、^{六百三十七}、^{六百三十八}、^{六百三十九}、^{六百四十}、^{六百四十一}、^{六百四十二}、^{六百四十三}、^{六百四十四}、^{六百四十五}、^{六百四十六}、^{六百四十七}、^{六百四十八}、^{六百四十九}、^{六百五十}、^{六百五十一}、^{六百五十二}、^{六百五十三}、^{六百五十四}、^{六百五十五}、^{六百五十六}、^{六百五十七}、^{六百五十八}、^{六百五十九}、^{六百六十}、^{六百六十一}、^{六百六十二}、^{六百六十三}、^{六百六十四}、^{六百六十五}、^{六百六十六}、^{六百六十七}、^{六百六十八}、^{六百六十九}、^{六百七十}、^{六百七十一}、^{六百七十二}、^{六百七十三}、^{六百七十四}、^{六百七十五}、^{六百七十六}、^{六百七十七}、^{六百七十八}、^{六百七十九}、^{六百八十}、^{六百八十一}、^{六百八十二}、^{六百八十三}、^{六百八十四}、^{六百八十五}、^{六百八十六}、^{六百八十七}、^{六百八十八}、^{六百八十九}、^{六百九十}、^{六百九十一}、^{六百九十二}、^{六百九十三}、^{六百九十四}、^{六百九十五}、^{六百九十六}、^{六百九十七}、^{六百九十八}、^{六百九十九}、^{七百}、^{七百一十}、^{七百一十一}、^{七百一十二}、^{七百一十三}、^{七百一十四}、^{七百一十五}、^{七百一十六}、^{七百一十七}、^{七百一十八}、^{七百一十九}、^{七百二十}、^{七百二十一}、^{七百二十二}、^{七百二十三}、^{七百二十四}、^{七百二十五}、^{七百二十六}、^{七百二十七}、^{七百二十八}、^{七百二十九}、^{七百三十}、^{七百三十一}、^{七百三十二}、^{七百三十三}、^{七百三十四}、^{七百三十五}、^{七百三十六}、^{七百三十七}、^{七百三十八}、^{七百三十九}、^{七百四十}、^{七百四十一}、^{七百四十二}、^{七百四十三}、^{七百四十四}、^{七百四十五}、^{七百四十六}、^{七百四十七}、^{七百四十八}、^{七百四十九}、^{七百五十}、^{七百五十一}、^{七百五十二}、^{七百五十三}、^{七百五十四}、^{七百五十五}、^{七百五十六}、^{七百五十七}、^{七百五十八}、^{七百五十九}、^{七百六十}、^{七百六十一}、^{七百六十二}、^{七百六十三}、^{七百六十四}、^{七百六十五}、^{七百六十六}、^{七百六十七}、^{七百六十八}、^{七百六十九}、^{七百七十}、^{七百七十一}、^{七百七十二}、^{七百七十三}、^{七百七十四}、^{七百七十五}、^{七百七十六}、^{七百七十七}、^{七百七十八}、^{七百七十九}、^{七百八十}、^{七百八十一}、^{七百八十二}、^{七百八十三}、^{七百八十四}、^{七百八十五}、^{七百八十六}、^{七百八十七}、^{七百八十八}、^{七百八十九}、^{七百九十}、^{七百九十一}、^{七百九十二}、^{七百九十三}、^{七百九十四}、^{七百九十五}、^{七百九十六}、^{七百九十七}、^{七百九十八}、^{七百九十九}、^{八百}、^{八百一十}、^{八百一十一}、^{八百一十二}、^{八百一十三}、^{八百一十四}、^{八百一十五}、^{八百一十六}、^{八百一十七}、^{八百一十八}、^{八百一十九}、^{八百二十}、^{八百二十一}、^{八百二十二}、^{八百二十三}、^{八百二十四}、^{八百二十五}、^{八百二十六}、^{八百二十七}、^{八百二十八}、^{八百二十九}、^{八百三十}、^{八百三十一}、^{八百三十二}、^{八百三十三}、^{八百三十四}、^{八百三十五}、^{八百三十六}、^{八百三十七}、^{八百三十八}、^{八百三十九}、^{八百四十}、^{八百四十一}、^{八百四十二}、^{八百四十三}、^{八百四十四}、^{八百四十五}、^{八百四十六}、^{八百四十七}、^{八百四十八}、^{八百四十九}、^{八百五十}、^{八百五十一}、^{八百五十二}、^{八百五十三}、^{八百五十四}、^{八百五十五}、^{八百五十六}、^{八百五十七}、^{八百五十八}、^{八百五十九}、^{八百六十}、^{八百六十一}、^{八百六十二}、^{八百六十三}、^{八百六十四}、^{八百六十五}、^{八百六十六}、^{八百六十七}、^{八百六十八}、^{八百六十九}、^{八百七十}、^{八百七十一}、^{八百七十二}、^{八百七十三}、^{八百七十四}、^{八百七十五}、^{八百七十六}、^{八百七十七}、^{八百七十八}、^{八百七十九}、^{八百八十}、^{八百八十一}、^{八百八十二}、^{八百八十三}、^{八百八十四}、^{八百八十五}、^{八百八十六}、^{八百八十七}、^{八百八十八}、^{八百八十九}、^{八百九十}、^{八百九十一}、^{八百九十二}、^{八百九十三}、^{八百九十四}、^{八百九十五}、^{八百九十六}、^{八百九十七}、^{八百九十八}、^{八百九十九}、^{九百}、^{九百一十}、^{九百一十一}、^{九百一十二}、^{九百一十三}、^{九百一十四}、^{九百一十五}、^{九百一十六}、^{九百一十七}、^{九百一十八}、^{九百一十九}、^{九百二十}、^{九百二十一}、^{九百二十二}、^{九百二十三}、^{九百二十四}、^{九百二十五}、^{九百二十六}、^{九百二十七}、^{九百二十八}、^{九百二十九}、^{九百三十}、^{九百三十一}、^{九百三十二}、^{九百三十三}、^{九百三十四}、^{九百三十五}、^{九百三十六}、^{九百三十七}、^{九百三十八}、^{九百三十九}、^{九百四十}、^{九百四十一}、^{九百四十二}、^{九百四十三}、^{九百四十四}、^{九百四十五}、^{九百四十六}、^{九百四十七}、^{九百四十八}、^{九百四十九}、^{九百五十}、^{九百五十一}、^{九百五十二}、^{九百五十三}、^{九百五十四}、^{九百五十五}、^{九百五十六}、^{九百五十七}、^{九百五十八}、^{九百五十九}、^{九百六十}、^{九百六十一}、^{九百六十二}、^{九百六十三}、^{九百六十四}、^{九百六十五}、^{九百六十六}、^{九百六十七}、^{九百六十八}、^{九百六十九}、^{九百七十}、^{九百七十一}、^{九百七十二}、^{九百七十三}、^{九百七十四}、^{九百七十五}、^{九百七十六}、^{九百七十七}、^{九百七十八}、^{九百七十九}、^{九百八十}、^{九百八十一}、^{九百八十二}、^{九百八十三}、^{九百八十四}、^{九百八十五}、^{九百八十六}、^{九百八十七}、^{九百八十八}、^{九百八十九}、^{九百九十}、^{九百九十一}、^{九百九十二}、^{九百九十三}、^{九百九十四}、^{九百九十五}、^{九百九十六}、^{九百九十七}、^{九百九十八}、^{九百九十九}、^{一千}、^{一千一十}、^{一千一十一}、^{一千一十二}、^{一千一十三}、^{一千一十四}、^{一千一十五}、^{一千一十六}、^{一千一十七}、^{一千一十八}、^{一千一十九}、^{一千二十}、^{一千二十一}、^{一千二十二}、^{一千二十三}、^{一千二十四}、^{一千二十五}、^{一千二十六}、^{一千二十七}、^{一千二十八}、^{一千二十九}、^{一千三十}、^{一千三十一}、^{一千三十二}、^{一千三十三}、^{一千三十四}、^{一千三十五}、^{一千三十六}、^{一千三十七}、^{一千三十八}、^{一千三十九}、^{一千四十}、^{一千四十一}、^{一千四十二}、^{一千四十三}、^{一千四十四}、^{一千四十五}、^{一千四十六}、^{一千四十七}、^{一千四十八}、^{一千四十九}、^{一千五十}、^{一千五十一}、^{一千五十二}、^{一千五十三}、^{一千五十四}、^{一千五十五}、^{一千五十六}、^{一千五十七}、^{一千五十八}、^{一千五十九}、^{一千六十}、^{一千六十一}、^{一千六十二}、^{一千六十三}、^{一千六十四}、^{一千六十五}、^{一千六十六}、^{一千六十七}、^{一千六十八}、^{一千六十九}、^{一千七十}、^{一千七十一}、^{一千七十二}、^{一千七十三}、^{一千七十四}、^{一千七十五}、^{一千七十六}、^{一千七十七}、^{一千七十八}、^{一千七十九}、^{一千八十}、^{一千八十一}、^{一千八十二}、^{一千八十三}、^{一千八十四}、^{一千八十五}、^{一千八十六}、^{一千八十七}、^{一千八十八}、^{一千八十九}、^{一千九十}、^{一千九十一}、^{一千九十二}、^{一千九十三}、^{一千九十四}、^{一千九十五}、^{一千九十六}、^{一千九十七}、^{一千九十八}、^{一千九十九}、^{二千}、^{二千一十}、^{二千一十一}、^{二千一十二}、^{二千一十三}、^{二千一十四}、^{二千一十五}、^{二千一十六}、^{二千一十七}、^{二千一十八}、^{二千一十九}、^{二千二十}、^{二千二十一}、^{二千二十二}、^{二千二十三}、^{二千二十四}、^{二千二十五}、^{二千二十六}、^{二千二十七}、^{二千二十八}、^{二千二十九}、^{二千三十}、^{二千三十一}、^{二千三十二}、^{二千三十三}、^{二千三十四}、^{二千三十五}、^{二千三十六}、^{二千三十七}、^{二千三十八}、^{二千三十九}、^{二千四十}、^{二千四十一}、^{二千四十二}、^{二千四十三}、^{二千四十四}、^{二千四十五}、^{二千四十六}、^{二千四十七}、^{二千四十八}、^{二千四十九}、^{二千五十}、^{二千五十一}、^{二千五十二}、^{二千五十三}、^{二千五十四}、^{二千五十五}、^{二千五十六}、^{二千五十七}、^{二千五十八}、^{二千五十九}、^{二千六十}、^{二千六十一}、^{二千六十二}、^{二千六十三}、^{二千六十四}、^{二千六十五}、^{二千六十六}、^{二千六十七}、^{二千六十八}、^{二千六十九}、^{二千七十}、^{二千七十一}、^{二千七十二}、^{二千七十三}、^{二千七十四}、^{二千七十五}、^{二千七十六}、^{二千七十七}、^{二千七十八}、^{二千七十九}、^{二千八十}、^{二千八十一}、^{二千八十二}、^{二千八十三}、^{二千八十四}、^{二千八十五}、^{二千八十六}、^{二千八十七}、^{二千八十八}、^{二千八十九}、^{二千九十}、^{二千九十一}、^{二千九十二}、^{二千九十三}、^{二千九十四}、^{二千九十五}、^{二千九十六}、^{二千九十七}、^{二千九十八}、^{二千九十九}、^{三千}、^{三千一十}、^{三千一十一}、^{三千一十二}、^{三千一十三}、^{三千一十四}、^{三千一十五}、^{三千一十六}、^{三千一十七}、^{三千一十八}、^{三千一十九}、^{三千二十}、^{三千二十一}、^{三千二十二}、^{三千二十三}、^{三千二十四}、^{三千二十五}、^{三千二十六}、^{三千二十七}、^{三千二十八}、^{三千二十九}、^{三千三十}、^{三千三十一}、^{三千三十二}、^{三千三十三}、^{三千三十四}、^{三千三十五}、^{三千三十六}、^{三千三十七}、^{三千三十八}、<

于富士沼之水鳥等群立。其羽音偏成軍勢之粧。依之平氏等驚駭。この官軍(平氏)が敗走したため、政局は新たな展開をみせることとなった。一方、福原では「伝聞、前將軍宗盛、可_レ有_レ遷都_之由、示_二禪門_一(清盛)云々、不_レ承引之間、及_二口論_一、人以驚_二耳云々_一」⁽³⁾とあるように、宗盛は遷都問題で父清盛と口論に及ぶに至り、遂に、平氏は法皇・上皇・天皇以下の遷都を決意した。

かくて、遷都した平氏一門を待ちうけていたものは、同年十二月、近江賊徒の動きに呼応した園城寺・延暦寺僧徒および南都衆徒の南北よりする六波羅攻撃の風聞であった。そこで、平氏は先手をとって、重衡が園城寺攻撃と南都焼打を決定した。この情勢の緊迫化する中で、「伝聞、禪門委_二天下事_一於前幕下_二了云々_一」(清盛から宗盛への政權の委譲か。)のことがあり、まもなく、平氏の孤立化を恐れた清盛は、法皇が従来どおり天下の政を統べるように、法皇に申し入れ、遂に法皇の権力に屈服した。このため、治承五年正月、法皇から天下万機を聞食することが仰せ出され、ここに後白河院政が復活した。そして、この局面で、高倉上皇は崩御され、その仰置といわれる「諸國之勇士、併有謀叛之心、仍先五畿内、及近江、伊賀、伊勢、丹波等国、可_レ被_二補武士_一、以禦_二遠國之凶徒_一之由、(中略)但毎國、不_レ可_レ必任_二武勇之國宰_一、只件等国、総而可_レ被_二置_二管領之司_一、」の施策によって、これらの諸國の総官に宗盛が任ぜられた。もちろん、この総官設置は宗盛自身の希望であった。⁽²⁰⁾(併わせて、同年二月、平盛俊が丹波国諸庄園総下司となる。)この頃、近江、美濃、伊勢などの戦況は膠着状態を続けており、平氏はその打開策として、「伝聞、関東徒党

其勢及数万、官兵厄弱、仍俄前將軍宗盛已下一族武士大略可下向、来月六七日之比云々」とあるように、同年二月には、関東鎮圧のため、追討軍の本格的な編成を考慮し、その下向時期もほぼ内定の運びとなった。一方、同年閏二月に入ると、「筑前国司(平)貞能申上云、兵糧已尽了、於今者無計略云々、仍為_二急攻_一、前幕下(宗盛)俄欲_二下向之間_一、」として、鎮西謀叛の追討も積極的に考慮すべき段階を迎えた。しかるに、頭風の病(熱病ともいう。)にあった父の前太政大臣入道清盛(六四才)は、その所悩が日増しに重くなり、平氏一門の慟哭のうちに、遂に薨去するに至った。ときに、治承・寿永の内乱の過中に置かれていた平氏一門の浮沈は、棟梁後継者(嫡流)の地位にあった三五才の正二位・前権大納言宗盛の政治力に依存することとなった。すなわち、この段階で宗盛に残された課題は、関東の鎮圧および後白河院政との協調関係の推進であった。⁽²¹⁾

註

(15) 玉葉 治承三年十一月十四日、十五日、十八日、十九日、廿日条。

山槐記 治承三年十一月十四日、十五日、十八日、十九日、廿日条。

百鍊抄 治承三年十一月十五日、十六日、十七日、十八日、廿日条。

石母田正「古代末期政治史序説」下巻四七〇―四八七頁。
なお、平氏知行国のうち、宗盛が知行国主であったのは、播磨(国守平行盛)、駿河(国守平維時)、阿波(国守平宗親)であり、最近の研究には、石丸熙「院政期知行国制の一考察」(北大文学部紀要二八号)六六―六七

頁、一〇〇頁、一〇三頁がある。

(16) 山槐記 治承三年十二月十六日、治承四年三月十八日、十九日条。

百鍊抄 治承四年二月廿日条。

玉葉 治承四年三月十六日条。

(17) 吾妻鏡 治承四年四月九日、廿七日条。

玉葉 治承四年五月廿一日、廿七日、卅日条。

山槐記 治承四年五月廿六日、卅日条。

百鍊抄 治承四年五月卅日条。

(18) 玉葉 治承四年六月二日条。

百鍊抄 治承四年六月二日条。

(19) 玉葉 治承四年九月廿日、十一月五日、八日、廿一日、廿四日条。

山槐記 治承四年十一月廿四日条。

吉記 治承四年十一月廿四日条。

吾妻鏡 治承四年十月廿日条。

(20) 玉葉 治承四年十二月十四日、十六日、十八日、治承五年正月十六日、十九日、廿七日、二月八日条。

なお、総官職および総下司職の設置については、石母田正「平氏政権の総官職設置」(歴史評論一〇七号)では、「平氏一族の惣領の地位にある宗盛を、畿内、周辺九箇国の総官に補任したことは、総下司に平氏の有力家人を配置する措置とあいまって、宗盛を頂点とする平氏一族の権力集中を制度的に表現したものとみられる。」と説明し、また、石丸氏「前掲論文一一二―一一三頁」では、両職は、「明らかに平氏政権の機構的変革なのであるが、それは内乱の過程にあらわれた知行国制の欠陥を補うためのものであって、あくまでも知行国支配を基礎としている。」と述べている。

(21) 玉葉 治承五年二月廿六日、廿七日、廿八日、閏二月一日、四日条。

吾妻鏡 養和元年閏二月四日条。

百鍊抄 養和元年閏二月四日条。

三

治承五年閏二月は、宗盛にとって、名実ともに平氏一門の棟梁という立場での多難な出発点となった。そして、清盛の薨去の翌日には、早くも、「左少弁行隆密語云、去夜、法皇宮、武士群集之由、有風聞、人以爲、法皇与前幕下有變異之心、誠是天下衰亡之至也云々、昨日朝、禪門以內実法眼^{乱、国家之當屬、天下之賊也。}、每事仰合、可^レ被計行^二也云々者、勅答不詳、爰禪門有含怨之色^二、召行隆^一仰云、天下事、偏前幕下之取也、不可^レ有異論云々、」が示すように、法皇と宗盛の間には対立的な素因が生じ、また、院殿上での関東乱逆の僉議における「前大將宗盛卿奏^二院云、故入道所行等、雖有^レ不叶^二愚意之事等^一、不能^レ諫争^二、只守^二彼命^一、所寵過^二也、於^レ今者、万事偏^二以院宣之趣^一、可^レ存行^二候、先関東兵糧已尽、無力征伐^一、如^二故入道之沙汰^一者、西海北陸道等運上物、併点定、可^レ宛^二彼粮米云々、此条又何様可^レ候哉、」には、宗盛の政治的姿勢がみられる。それは平氏の衰頹を示唆し、その夜の八条坊門第(故清盛邸)の炎上は、その兆しを具現したかのようであった。(しかし、一方、平氏と院政との関係については、同年三月、備前の知行国主に高階信章を任ずるという法皇

の意志が、宗盛のために否定され、この知行国主が重衡に決まったことがあり、治承四年十二月に復活した後白河院政は形式的なもので、宗盛による院政の独占的な執行は寿永二年七月まで続いたといわれる⁽²²⁾。

このような推移の中で、宗盛は、まず武勇の器量といわれる弟の重衡が率いる追討軍を美濃・尾張の境に進発させ、同年三月の墨俣合戦では源行家を敗走せしめた。当時、宗盛は天性大食のため食癪の病（胃拡張か）であったという⁽²³⁾。そして、肥後国住人菊池高直追討のための宣旨が下った同年四月、宗盛の許に落書がとどけられた。その内容は、法皇の比叡山御幸を行ない、その間に延暦寺僧徒が叔父の頼盛と謀議して、宗盛邸を夜打ちするという不穏なものである。これは当時、すでに宗盛と頼盛の間に何んらかの理由で不和が生じていたことを示す。ところで、養和元年七月には、この落書を打消すかのように、法皇は宗盛の六波羅第に御幸している。この頃、北陸道の謀叛、および、うち続く炎旱・飢饉によって官軍（平氏）は兵糧米に欠乏をきたし、宗盛はその対策に苦慮していた⁽²⁴⁾。

この宗盛は、さらに同年八月、源頼朝の院奏「如古昔、源氏平氏相並、可召仕也、関東為源氏之進止、海西為平氏之任意、共於国宰者、自可被補、只鎮東西之乱」を内々で伝達されたが、これには、「故禅門（清盛）閉眼之刻、遺言云、我子孫、雖一人生残者、可曝骸於頼朝之前云々、然者、亡父之誠、不可不用、仍於此条者、雖為勅命、難（請）申者也云々、」という考え方で対処するとともに、院に奏して、

関東の頼朝を背後から牽制する意味で、藤原秀衡を陸奥守に、平親房を越前守に、平助職を越後守にそれぞれ任ずる一方で、戦線の拡大が憂慮される北陸謀叛を鎮圧するため、従弟の経正・通盛等を北陸道に向け進発させた。しかし、北陸では官軍（平氏）が敗北を喫した。そこで、宗盛は武力のみによる謀叛の鎮圧を改め、他の方法によるべきことを痛感した⁽²⁵⁾。かくて、養和二年四月には清宗が正三位に叙し、寿永元年九月、三十六才の宗盛は、権大納言に還任し、ついで、同年十月内大臣に任ぜられ、寿永二年正月法皇の円勝寺御幸に供奉し、その後、従一位に叙した。同年二月、幼少の次子能宗も従五位上となる。一方、北陸道に下向した維盛以下の追討軍（十万騎余）は、同年五月越中国の合戦で敗北を喫し、やむなく帰洛することとなった。その結果、同年七月に入ると、北陸賊徒（源義仲）の近江国への侵攻が噂され、官軍の京都防衛線は勢多付近に後退せよとの意見さえ、平氏一門から出るに至った。この頃、宗盛（寿永二年二月内大臣を辞している）は、一門の公卿十人と連署した起請文を比叡山に送っている。その内容は、延暦寺をもつて平氏の氏寺とし、日吉社をもつて平氏の氏社とするというもの（藤原氏と興福寺・春日社の関係に擬す）で、その目的は延暦寺僧徒をして平氏に与力せしめること、すなわち、南都北嶺の寺院勢力の連合を阻止し、かつ、これらの勢力の分断を意図したものである⁽²⁶⁾。

このとき、京都を目ざした源義仲の率いる北陸賊徒が近江の東坂本に到達した。ために、京都防衛の困難さを痛感した平氏一門、なかんずく宗盛は、遂に、西国にて兵力を貯え、しかる後に、再

度の上落を実現して、平氏政権の復活を計ることを考え、一時的な都落ちを決断するに至った。しかして、これには、法皇・天皇および摂関家以下の貴族層との提携が前提であった。ところが、

この平氏の行動を密告によって、事前に察知した法皇が院中の人々にも知られないように、ひそかに法住寺殿を夜半に出御して、比叡山に臨幸（逐電）したため、宗盛以下の平氏一門は法皇を連れての都落ちを断念し、「前内大臣（宗盛）已下率一族出奔西国。天皇建礼門院同奉相具。内侍所神鏡。神璽。宝剣（中略）皆以相具。六波羅以下家同時放火。洛中騒動。」となった。そのうえ、叔父の頼盛一族は平氏一門から離脱して京都に留り、摂政基通までも途中から逐電するに至った。なお、法皇への密告については、「去月廿日比、前内府、及重衡等密議云、奉具法皇、可赴海西、若又可参住法皇宮云々、聞如此之評定、以女房、故御親愛物、白密告法皇、可被報此功云々、」といった事情があった。そして、平氏一門の都落ち直後、法皇は比叡山から帰洛のうえ、ただちに、公卿を召して、「前内大臣已下奉具幼主。赴西海之間。神鏡。劍璽已下取畢。何様可有沙汰哉事。」を議定し、折りから入京した義仲・行家の源氏軍に対して、宗盛以下党類の追討を仰せ出された。ここに、これまでの平氏官軍の立場は、一転して平氏賊軍の立場となった。

註

(22) 玉葉 治承五年閏二月五日、六日、三月六日条。

百鍊抄 養和元年閏二月六日条。

なお、石丸氏前掲論文七六頁（註12）、一一四頁（註13）において、寿永二年七月までの平氏による院政の独

平宗盛抄（石塚）

占的な執行にふれている。

(23) 玉葉 治承五年閏二月十五日、廿九日、三月十日、十三日条。

百鍊抄 養和元年閏二月十五日、三月十日条。

吾妻鏡 養和元年三月十日条。

(24) 玉葉 治承五年四月一日、七月十三日、十七日、九月六日条。愚管抄 二一九頁

吉記 治承五年四月十四日条。

なお、宗盛と頼盛の不和は、平治物語の所産である頼盛の生母池の禪尼の助命懇願による源頼朝の助命問題が、かりに史実であるとすれば、これを起因とし、かつ、清盛の死後に至って、平氏一門の内部に助長された嫡流宗盛と傍流頼盛の感情的な対立の結果と推測する。

(25) 玉葉 治承五年八月一日、六日、十五日、九月二日、九日、卅日、十月十日、養和二年三月十二日条。

吾妻鏡 養和元年八月十三日、十五日、十六日、九月四日条。

百鍊抄 養和元年八月十五日、九月六日条。

(26) 玉葉 寿永元年八月廿三日、九月四日、十月三日、七日、十三日、廿一日、寿永二年正月十一日、二月廿一日、五月十六日、六月六日、七月一日、二日、八日条。

吉記 寿永元年九月十七日条。

百鍊抄 寿永二年四月十七日、廿七日、五月十一日条。

平安遺文 四〇五七号

(27) 玉葉 寿永二年七月廿一日、廿二日、廿三日、廿五日、廿六日、廿七日、廿八日、八月二日条。

百鍊抄 寿永二年七月廿一日、廿二日、廿四日、廿五日、廿七日、廿八日条。

四

寿永二年八月、京都では西国に赴いた平氏一門の除名および解官が断行された。これらの処分をうけた人々は、次のとおりである。◎除名ニ宗盛三七才(従一位・前内大臣)、通盛(従三位・前越前守)、◎解官ニ清宗一四才(正二位・右衛門督)、知盛三二才(従二位・権中納言)、重衡二七才(正三位・左近衛権中將)、経盛六〇才(正三位・参議)、教盛五六才(従二位・中納言)、頼盛五二才(正二位・権大納言)、維盛四才(従三位・右近衛権中將)、資盛(従三位・右近衛中將)、時忠五四才(正二位・権大納言)、親宗四〇才(正四位下・右大弁)など――。

ついで、院中では、安徳天皇の還御を待つか、劔璽が無くとも新しい天皇を立てるか、議題となり、これに関連して、時忠を経由させる方法で宗盛に対し、劔璽以下の宝物等(三種神器)の返還を要求することとなった。この頃、平氏は四国・淡路・安芸・周防・長門ならびに鎮西諸国の与力を得て、備前国児島に、船幾百余艘を集結させていたという。しかして、京都では尊成親王(四才)父は高倉上皇、母は藤原殖子)の踐祚があり、源義仲は平氏追討のため西国に下向することとなったが、平氏は美作国以西を押えており、源氏(官軍)の先鋒は同年閏十月備中国で敗北し、さらに同年十一月源行家が播磨国へ下向したが、これも敗走して帰洛した。また、一方では、鎮西の平氏は国人の反撃にあつて、四国へ移動したともいわれた。この前後、京都を脱出した頼盛は関東に逐電した(その意図は頼盛一族の保身を計るためであ

る)。同月、義仲は軍兵を率いて、俄かに院御所に攻め寄せて火を放ち、後白河天皇、御鳥羽天皇(尊成親王即位前)が避難すると、年少の師家を内大臣・摂政・藤氏長者に宣下し、院近習など数十人を解官せしめ、「平家領義仲可_レ物領_二之由_一」といった院庁下文まで出させるとともに、関東源氏の上洛が伝わる中で、播磨国室泊に進出した平氏に和親を求めた。当然、平氏はこれを拒否した。そのうち、寿永三年正月、源義経等の関東勢が宇治・勢多を経て入洛し、これと合戦を交えた義仲(征夷大將軍を称す)は敗れて粟津で討死を遂げた。やがて、京都を占拠した関東源氏に対して、平氏追討の宣旨「₍₃₀₎令_レ散位源朝臣頼朝追討前内大臣平朝臣以下党類_二事_一」が出された。

当時、平氏は福原に戻っていたが、同年二月になると、「平家日来相_二從西海山陰兩道軍士数万騎。拓_レ城廓於摂津与播磨之境一谷_一。各群集。」して、「新三位中將資盛卿、(中略)已下七千余騎。着于当国三草山之西。源氏又陣于同山之東。隔三千里行程。」といった戦況であった。そこに義経の源氏軍が焼天を待たず夜半に重衡の陣営を奇襲したことで、平氏軍は大混乱に落ち入った。すなわち、「自_二鴨越_一(中略)被_二攻戦間、失_二商量敗走。或策_二馬出_二三谷之館_一。(中略)爰_二本三位中將重衡。於_二明石浦_一。為_二京時。家国等_一被_二生虜_一。」(このとき、通盛、忠度、経俊、経正、師盛、教盛、知章、敦盛、業盛、盛俊など平氏一門の多数が討死した。)ために、宗盛以下の平氏は先帝(安徳天皇)を具して海上を四国に赴いた。いわゆる一ノ谷合戦である。₍₃₁₎この直後、源氏軍の帰洛と前後して、京都に護送された重衡は、劔璽を取り返

そうと計る法皇を中心とする院近臣に利用され、彼の郎従の左衛門尉重国を四国に派遣し、宗盛に勅定の旨「旧主（先帝）并三種宝物可奉_レ飯洛之趣」を伝える役割を演じている。そこで、宗盛は、この勅定に対して返書をしたためて京都に送った。吾妻鏡によれば、この返書では、(1)平氏の西国下向の経緯、(2)平氏追討の院宣を義仲および頼朝に与えた怨み、(3)いま、平氏は頼朝と戦っているが、法皇以下の近臣が本心から和親を考えているならば、平氏も和平には異存がないこと、——などの諸点にふれ、その結びとして、「於_レ今者。早停_二合戦之儀_一。可_レ守_二攘災之誠_一候也、云_三和平云_二聖御_一。兩条阜蒙_二分明之_一院宣。可_レ存知_二候也_一。以此等之趣_一。可_レ然之様。可_レ令_二披露給_一と述べており、これには宗盛の法皇に対する猜疑心が明示されている。⁽³²⁾一方、玉葉によれば、その返事の内容は、「畏承了、於_三ケ宝物并主上女院八条〔院〕殿者、如_レ仰可_レ令_二上洛_一、於_三宗盛_一ハ不能_二参入_一、賜_二讃岐国可_レ安堵_一、御共等ハ清宗ヲ可_レ令_二上洛_一云々、」とある。しかし、この時点に至っては、このような文面をもって、平氏追討を撤回させるような情勢変化を期待することは、すでに対院政、対頼朝との関係からみて不可能であった。これは平氏一門の棟梁としての宗盛が、中央政府への巻返しの足がかりを求めている法皇に対する妥協案であった。もちろん、この宗盛の希望は是認されず、双方の交渉は決裂し、同年三月には、頼朝の要請で重衡は東国に護送された。そのうち、同年四月、屋島に拠る宗盛の病死が京都に伝わったが、これは謬説であった。⁽³³⁾

この情勢下、同年七月、後鳥羽天皇が即位された。この頃、惣

平宗盛抄（石塚）

の行盛は備前国児嶋に城廓を構え、中国路における平氏の拠点となした。そこで寿永四年正月、源範頼の軍勢は中国路を押えて周防国から赤間関に進攻した。さらに同年二月、宗盛は讃岐国屋島に城廓を構え、一方、知盛は門司関を固めて彦島に陣営を置いた。かくて、義経の源氏軍が四国に來襲した。この模様については、「廷尉義経。昨日終夜。越阿波国与讃岐之境中山_一。今日辰尅。到_三屋嶋内裏之向浦_一。焼_二私牟礼_一。高松民屋_一。依_レ之。先帝令_レ出_二内裏御_一。前内府又相_二華一族等_一浮海上_一。（中略）焼_二失内裏并内府休幕以下舍屋_一。黑煙聳_二天_一。」といわれる。よって、宗盛以下の平氏一門は先帝を奉じて、一路、海上を彦島に向け移動した。⁽³⁴⁾ついで、同年三月、源平両氏による世紀の海上合戦が長門国壇ノ浦で展開された。その情況は、「於_三長門国赤間関壇浦海上_一。源平相逢。各隔_三三町_一。艘_二向舟船_一。平家五百余艘分_三三手_一。以_三山峨兵藤次秀遠并松浦党等_一為_二大將軍_一。挑_二戰于源氏之將師_一。及_二午刻_一。平氏終敗頤。二品_二禪尼持_一宝劔。按察局奉_二抱先帝_一。奉_二取_一之。建礼門院_{御衣}入水御之處。渡部党源五馬允以_二熊手_一奉_二取_一之。按察局存命。但先帝終不_レ令_二浮御_一。若_二宮_一上者御存命云々。前中納言_{教隆}号_二入水_一。前參議_{教盛}出_二戰場_一。至_二陸地_一。出家。立還又沈_二波底_一。新三位中将_{實盛}。前少將有盛朝臣等。同没_二水_一。前内府宗盛。右衛門督清宗等者。為_二伊勢三郎能盛_一被_二生虜_一」であった。⁽³⁵⁾

この結果、同年四月、生虜となった宗盛・清宗父子、時忠などが入洛した。その様子は、「各乗車、上_二車廉_一着_二浄衣_一云々、清宗卿同_二車前内府_一云々、盛隆、季貞以下生虜、并_二婦降之輩_一、騎馬

在車後、武士等圍繞云々、兩人共安置義経家。」であつた。また、帰洛した御存命の若宮（守貞親王¹¹後鳥羽天皇の兄）は七条坊門亭に入り、建礼門院は同年五月に落飾された。そして、頼朝の命により、まもなく、義経等は生虜の宗盛・清宗父子以下郎従を未処分のままで相具して東国に下向した³⁶。ところで、鎌倉での宗盛の態度については、「入夜、因州（大江広元）奉^レ仰雖^レ羞^レ膳。内府敢^レ不用^レ之。只^レ涕^レ愁涙^レ之外無^レ他云々。」といわれ、さらに、宗盛・清宗父子を遠流にすべきか、死罪にすべきかについての京都の議論が、頼朝の意に叶う処罰という方針に決し、その死罪決定が鎌倉に伝達された後日、比企能員が帰洛の近い宗盛を訪れ、頼朝の慰めの言葉を伝えた処、座していた宗盛は、立ち上つて哀れみを請うように、「被^レ報申之趣又不^レ分明。只^レ令^レ救^レ露命^レ給者。遂^レ出家^レ求^レ仏道^レ之由云々。」と、その心情を訴えたという。かくて、その数日後には、義経に相具して宗盛・清宗父子は帰洛の途についた。そして、近江国篠原宿において、護送の任にあつた橘公長のために、三九才の宗盛は遂に誅され、長子清宗（一六才）も野路口で堀景光によって斬られた。そのうえ、兩人の首級は京都の六条河原に運ばれて、後日、獄門樹に懸けられたのである。³⁷

註

(28) 百鍊抄 寿永二年八月六日条。

平安遺文 四〇四三号、四一〇〇号によれば、例えば、寿永二年八月、宗盛領とされている清澄庄のうち六町二段半、および、小東庄のうち五町六段は東大寺の進退にまかされている。

(29)

なお、頼盛は寿永三年六月、正二位・権大納言に、親宗は同年九月、従三位・参議に、それぞれ還任している。玉葉 寿永二年八月六日、十二日、十八日、九月五日、十月廿日、廿一日、閏十月二日、十三日、十四日、十七日、十八日、十一月六日条。

百鍊抄 寿永二年八月廿日、九月廿日、十一月八日条。多賀宗集「平頼盛について」（日本歴史 二五四号）

(30)

百鍊抄 寿永二年十一月十九日、廿日、廿五日、廿八日、十二月二日、元暦元年正月廿日条。

玉葉 寿永二年十一月廿七日、十二月二日、五日、寿永三年二月廿三日条。

(31)

玉葉 寿永三年二月四日、六日、八日、十九日条。吾妻鏡 元暦元年二月四日、五日、七日、八日、十五日条。

(32)

百鍊抄 元暦元年二月八日条。玉葉 寿永三年二月九日、十日条。

吾妻鏡 元暦元年二月廿日条。

(33)

玉葉 寿永三年二月廿九日、卅日、三月十日、四月十一日条。

吾妻鏡 元暦元年三月十日条。

(34)

百鍊抄 元暦元年七月廿八日条。

吾妻鏡 元暦元年十二月七日、文治元年正月十二日、二月十六日、十九日、廿一日、廿二日、三月八日、十六日条。

(35)

玉葉 元暦二年三月十六日条。

玉葉 元暦二年三月十七日、四月四日条。

吾妻鏡 文治元年三月廿一日、廿二日、廿四日、四月十一日条。愚管抄 二二九頁。

百鍊抄 文治元年三月廿四日、四月四日条。

(36) 玉葉 元暦二年四月廿六日、五月七日条。

百鍊抄 文治元年四月廿六日、五月七日条。

吾妻鏡 文治元年五月一日、十五日条。

(37) 玉葉 元暦二年四月廿一日、五月三日、六月廿二日、廿三日条。

吾妻鏡 文治元年四月廿六日、五月十六日、六月七日、

九日、廿一日、廿三日条。

百鍊抄 文治元年六月廿一日、廿三日条。

なお、宗盛とともに平氏一門の主要人物であった重衡・時忠をみるに、重衡は宗盛の斬首と前後して、南都衆徒によって誅された。一方、時忠は死一等を減ぜられ、能登国への配流処分を蒙った。

結 び

以上、古代末期Ⅱ治承・寿永の内乱期において、才能の卓越した政治家情盛の後継者として、過渡期平氏政権の中にその地位を占めた平宗盛について概観したが、要するに、宗盛の生涯、とくに後半生は、治承五年の父清盛の死去によって、平氏一門の統率者という重責を担い、大天狗の異名で呼ばれた後白河法皇の策謀と、源頼朝を中心とする武家政権の確立を期待する武士階級との抗争の中で、苦難な政局に直面し、落日の平氏の象徴として壇ノ浦合戦に敗れ、最後には生虜になるという不運な人生であった。

ところで、宗盛について、若干、付言すると、第一に嫡流説がある。これについての安田氏の見解をみると、清盛の正室Ⅱ宗盛の生母時子(出自のよさ)の存在ならびにその発言力、および、

平宗盛抄(石塚)

長兄重盛などと比較しての宗盛の昇進の早さを一応の根拠としてゐる。しかし、一方、同書において、(1)宗盛は重盛・基盛の両兄の死によって平氏の嫡流を継ぐべき立場になった。(2)維盛は父の重盛の死により、嫡流家たるべき位置から、一転して傍流となった。という記述もされており、一般的なかえ方(重盛が死去したことにより、宗盛は嫡流を獲得できた。)を積極的に否定しているわけではない。⁽³⁸⁾もちろん、これについては、(i)清盛が早世し、宗盛幼少で、重盛(年令差、九才年長)が青年に達していた場合。(ii)重盛が治承五年(清盛死後)以降まで生存し、かつ健康であった場合。——などを想定するとき、重盛と宗盛の関係はどのように展開したであろうか、この点については興味がある。

また、仁安二年五月、兵範記によれば、「今日被上太政大臣并兵仗等辞表也、此間春宮大夫^{重盛}(中略)勅答向彼家之間、家督大納言重盛卿於中門請取之」とあり、かりに、宗盛の出生時からその嫡流の地位が約束されていたとすれば、仁安年間から治承三年までの期間における清盛の後継者(嫡流)をめぐる重盛と宗盛の立場には微妙なものがあつたと推測する。第二に宗盛にみる平氏一門の統率力の是否がある。これは生母時子による側面援護を考慮のうえで、一応は是認してもよいと思う。第三に宗盛の性格である。寿永三年十一月、吾妻鏡の源頼朝からその弟の範頼あて消息によれば、「内府(宗盛)は極て憶病におはする人なれば、自害などはよもせられし。生取に取て京へ具して上へし。」と記述され、さらに、前述の寿永四年六月における鎌倉での宗盛の態度については、「只、令^レ教^二路命^一給者。遂^ニ出家^一求^ニ仏道^一之由云

々。」とある。この憶病説に関連して、一般には、卑怯未練、凡庸非才、優柔不断とかいわれる宗盛ではあるが、前述の還都問題における清盛との口論（その内容の是否は別として）にみられるように、当然、宗盛は自己の見識を有しており、総官職の創設に伴う宗盛の就任などからみても、晩年の清盛からその後継者として期待されていたことは推測できる（かりに、宗盛が不適当ならば弟の知盛などもいる）。それに、宗盛の非武士的性格¹¹貴族性がとくに強調されるが、平氏一門にあつては、すべての人々が多かれ少なかれ公卿化現象を呈しており、ただ、その中で宗盛の貴族性がとくに顕著であつたに過ぎない。これは平氏の安定期（仁安・安元年間）に当る青年時代（二〇才¹²三〇才¹³）を宮廷貴族として過ごした生活環境の影響と個人的な資質のためであらう。——以上が宗盛についての二・三の視点である。（なお、本文中で示した年令は、すべて数え年である。）

註

（38） 安田元久「平家の群像」六七頁、一二八頁、一七〇——七二頁。

（39） 兵範記 仁安元年五月十七日条。

（40） 吾妻鏡 文治元年正月六日条。

この消息は、その後の宗盛の生虜をあまりにも予測しすぎており、後日の吾妻鏡編纂時の挿入（創作）であらう。

補註（註10）

院司としての宗盛の名前は、承安四年十二月十三日付後白河院序下文案（平安遺文三六六号）などにみえている。

補註1

小稿では、治承五年七月から元暦二年八月までの年号に就いては、平氏の立場で養和元年七月から寿永四年八月までとした。

補註2

前述の「註」で示した史料のほか、宗盛関係の史料の一部分を参考までに付記すると、帝王編年記¹⁴治承三年八月一日、十一月十六日、十七日、十八日、治承四年二月廿一日、六月二日、養和元年閏二月四日、三月十三日、寿永元年十月三日、寿永二年四月十七日、廿一日、七月廿五日、廿七日、廿八日、八月六日、廿日、元暦元年二月七日、文治元年三月廿四日、四月廿五日、廿九日、五月七日、六月廿三日条。兵範記¹⁵仁安三年七月十六日条ほか。玉葉¹⁶仁安三年十一月廿四日条ほか。吉記¹⁷承安四年八月廿一日条ほか。山槐記¹⁸治承三年三月十一日条ほか。吾妻鏡¹⁹治承四年十二月十九日条ほか。などである。

（追而）

この紙幅を借りて、拙稿「平清盛抄」（法政史学第二十一号）の字句訂正を、次のようにいたしたい。五三頁上段十六行目²⁰治承二年正月、五三頁下段二行目²¹春宮大夫に宗盛、五六頁上段六行目²²前中宮徳子（後の建礼門院）、註54に「帝王編年記養和元年十一月廿五日条」を加える。

（付記）

小稿は、昭和四七年二月二六日、法政大学大学院月例研究会において口頭で報告した「史料からみた平宗盛について」をまとめたものである。